

儒教から読み解く韓流ドラマ

古 田 富 建

帝塚山学院大学 リベラルアーツ学部 准教授

「近くて遠い国、韓国」というのが、もう 20 年ぐらい前から韓国をあらわすときのキャッチフレーズでした。しかし、今の若い大学生を相手に、「近くて遠い」なんていうと怒られます。「近くて近い」だろうと。気持ち的にも近いし、距離的にも近いわけで、「何を言っているんですか、先生」というふうに言われてしまうのです。また 2011 年 11 月号の『日経トレンドィ』で「『何でも韓国化』のなぜ」という特集が組まれていました。何でも韓国すばらしいと。ちょっと持ち上げ過ぎなんじゃないのかと思いましたが、食文化、化粧品、韓流スターなどを通じて、事実韓国はびっくりするぐらい近い国になってきました。

ドラマは 2004 年頃から一気に広まりましたが、この威力は本当にすごいですよね。韓流ドラマが日本人に韓国文化への興味を持たせる大きなきっかけになりましたし、「冬のソナタ」が NHK で放送されたというのも大きかったと思います。中高年は NHK の番組か、ドラマといえば若い子を見るトレンドィードラマは見ず、火曜サスペンスくらいしか見ない。そしてどうなったのかというと、ヨン様ブームのときに、火曜サスペンス劇場が終了しちゃったんですね。何でもかという、韓流ドラマに視聴率を取られてしまったからです。それぐらい韓国ドラマにはインパクトがありました。

今の大学生はどういう世代なのかというと、子どもの頃「冬のソナタ」を見て物心ついているんですね。ですから、かつての韓国の軍事独裁政権というのは、もちろん歴史の時間に習いますけれども、知らないわけです、体感的に。韓国に対して暗い、ちょっとおくられているとかそういうイメージが一切ないんです。「冬のソナタ」以降、日本が韓国ウエルカムになった時代しか記憶にないので、韓国に対して明るく元気なポジティブなイメージしかない。K-POP も非常にはやっていますので、韓国のアイドルに憧れる、韓国人に憧れる、そういう感覚を若い子は持っています。

しかし、「近くて遠い」というキーワードも、儒教文化というくりにした場合には、まだ有効なんじゃないのかなというふうに思います。儒教文化というのは日本にもあるんですが、韓国の時代劇などを見ても、日本の伝統的な文化とはだいぶ違う。これは一体何なのでしょう。もちろん親孝行をするとか、お殿様、王様に対して忠義を尽くすとか、共通するメンタリティーも持っているのですが、儀礼や作法なども何か違います。ドラマを見ている方は実感されていると思います。

では、日本にはない儒教的儀礼やマナーについて具体的にお話ししていきましょう。たとえば、

日本だと死者儀礼や供養はほとんど仏教に取り込まれていますけれども、韓国は儒教式に執り行います。よくドラマにも登場しますが、死んだ人が命日に幽霊として帰ってくるという世界観なんですね。ですから、まるで生きているかのように死んだおじいちゃん、おばあちゃんを迎えて、御飯を食べてもらう儀礼をするわけですね。祭壇には位牌を置きます。日本でも仏壇に位牌を飾りますがけれども、これは実は儒教文化なのです。この儒教式祭祀については後述します。

また韓国ではお酒を飲むとき、目上の人が目の前には、ちょっと横を向いて飲みます。これは儒教的なマナーで、年上の人に対しては敬意を表さなきゃいけない。それから、きちっとした敬語を使います。韓国ドラマの中にも「何でため口なんだ」とか「言葉遣いに気をつけなさい」みたいなやりとりが頻繁に登場しますね。日本では1歳や2歳の年齢差を、そんなに意識しませんが、韓国では言葉遣いに非常にこだわります。ですから、韓国人は初対面で相手の年齢を気にします。自分より年上なのか、年下なのか。それによって言葉遣いが変わってくるからです。こういうのは日本ではあまり見られない儒教文化だと思います。このように、儒教文化が分かると現代物でも時代劇でも、より楽しんで視聴できるんじゃないのかというふうに思います。

日本で儒教というと学問、儒学といったイメージが非常に強いんですね。「儒教ってどういうイメージですか」と学生に聞いても、孔子、孟子の思想だとか、書物をイメージするようです。「論語」とか「大学」とか「中庸」とか、そういう本。それから、「男尊女卑」とか「忠義」とか「親孝行」とか、目に見えないものとしてイメージすることが多いと思います。また、世界史を勉強すると朱子学といった用語が出てくるかもしれません。このように日本人は儒教について個人の倫理とか思想というところで理解をしています。

ですけれども、韓国人の中で儒教というのは、そういう学問とか倫理という側面ももちろんあるんですけれども、それだけじゃないものがあるんですね。

韓国の宗教人口の分布、比率をあらわした統計を見ると、儒教ってほとんどないんですね。0.5%しかない。ですから、「自分は儒教徒です」というふうに考えている韓国人というのはほとんどいないんです。これは、日本人がお正月には初詣でに行くんだけど、実は自分たちは神道の信徒だという自覚がないとか、仏式にお葬式はやるんだけど、お経は読めませんとか、そういう感覚に近いんじゃないのかなと思います。

統計上では仏教が一番多い。これは日本との大きな共通点です。では、日本との違いは何でしょうか。キリスト教徒が非常に多いことです。日本ではクリスチャンが宗教人口の中で1%しかいませんが、韓国は人口の4分の1はクリスチャン、これは大きな違いです。さらに宗教を信じている人の割合が日本は大体3割と言われていますけれども、韓国は半分ぐらいの人が何かしらの宗教を信じている。だから、日本だと、宗教と聞くといかがわしい、怪しい、要らないもの、社会悪といったイメージもありますけれども、韓国ではもう少しポジティブなイメージ、そういう違いもあります。

儒教というと、「孝」が大事だとされます。「孝」、「孝思想」は日本にもありますよね。親を大事にしましょうというし、敬老の日だってある。つまり、「孝」は東アジア共通のメンタリティーなわけですね。中国人だって、ベトナム人だって、みんな持っているメンタリティーなわけですね。ただ日本だと親孝行は「行」ですが、韓国は「道」なんですね。だから「孝道（ヒョド）」といいます。親孝行、「孝道（ヒョド）」、これは非常に大事とされています。

「孝」がいろんな商品にもなっています。例えばお年寄りが使う携帯電話は文字が大きく表示されていますね。あれを韓国語で「孝子フォン（ヒョジャボン）」というんですね。あとは孫の手、これも「孝子の手（ヒョジャソン）」というのです。このように孝というものが巷にあふれているのです。

まず、そもそも儒教とは何かということからさらっとお話をしていきます。中国から始まっていることは皆さんご存じだと思います。孔子に始まる思想ですね。漢の時代に国家の公認思想となって以降、中国はずっとこの儒教によって治められていたわけですね。2000年にわたり中国だけでなく、中国の影響下にある東アジア全域にこの思想が広がるわけです。

東アジア文化圏というふうに言われたときの特徴って何ですか。中国を中心とした東アジアの特徴とは、漢字と儒教なんですね。例えば東アジアの人同士、言葉はわからないけれども、漢字で筆談ができるとか、何となく同じようなメンタリティーを持っている。そのメンタリティーというのが儒教なわけです。

しかし、東アジア文化圏は儒教文化圏ですよといっても、どの国にも均一に儒教が広まったわけではありません。日本だったら、頭でっかちな思想として入ってきていますし、中国からより近いところは、より濃く儒教の影響を受けています。中国のものですけれども、本家本元よりもより一生懸命にとり入れたのは朝鮮半島でした。それで自国を儒教大国と表現しました。大国と言うのもちょっとおかしい話なんですけれども。世界で唯一、儒教の大学があるのが韓国です。皆さんもよくご存じのペ・ヨンジュンが通った大学、成均館大学がそうですね。東方神起のユチョンが演じたドラマ「トキメキ☆成均館スキャンダル」のもとになった大学です。

儒教というと欠かせないのは科挙です。そんなイメージないかもしれませんが、ベトナムでも実施された歴史があります。科挙試験とは、王様に仕える官吏を選ぶ国家試験、要するに前近代の国家官僚試験のことですね。この試験を実施することが儒教文化の一つの特徴です。ところが日本は前近代までは科挙を行っていません。明治時代から国家官僚試験を取り入れたわけですから。ベトナムとか朝鮮とかは中国に倣って早くから科挙を行ったわけなんですけれども、日本は実施していないので、中国とか朝鮮から見たら、日本は儒教国家ではないというふうに言われてもおかしくないですね。

朝鮮半島で、本格的に儒教が利用され始めたのは14世紀からです。儒教には様々な学派があります。日本には陽明学も含めて多種多様な学派が同時期に入ってきたわけですが、朝鮮の主流は

1つだけ。世界を理と気の2つの要素でとらえる、朱子学といわれる思想でした。

というわけで、朝鮮王朝も始まった当時はまだ仏教国だったんです。もっといえば「朱蒙（チュモン）」のような三国時代以前はシャーマニズムの時代で、「善徳女王」とか「太王四神記」なんかの時代は仏教の時代でした。「イ・サン」とか「チャングムの誓い」になると儒教の時代になります。朝鮮王朝も初めは仏教の影響が非常に強かったけれども、14世紀から徐々に儒教が広まっていき、だんだんと儒教の影響が大きくなっていったのが分かります。

朝鮮の儒教の特徴は何なのかというと、中国よりも徹底されているという点です。本家本元を抜かしたというお話は先ほどしましたけれども、王様から、卑しいと言われる身分の人まで徹底的に儒教の教化のもとにさらされたというのは朝鮮半島しかないんですね。儒教は美風や慣習として、これいいよという感じで何となく広がっていったんじゃないんです。王様から庶民までを厳しくしつけ、徹底的に教化して、儒教の国に変わっていったんです。中国でも皇帝が儒教で国を治めていましたが、庶民が民間信仰を信じようと、しよせん庶民だからとそこまで強要しませんでした。ところが朝鮮は小さい国ですから国民全体を統制したわけですね。上は王様から下は庶民まで儒教によってがんじがらめにする、それが朝鮮王朝時代なわけです。

このように儒教は、朝鮮王朝時代に国のすみずみにまで広まり、体制教学、王権儀礼、教育、民衆生活の習慣、マナー、それから冠婚葬祭に至るまで浸透しました。

ここまで儒教を徹底した国は珍しいです。近代化の中で儒教というのは余り合理的でないということで一旦否定されます。中国なんかは、近代に入ると文化大革命で儒教を否定しますね。また、日本は、近代、儒教と天皇制イデオロギーとが結びつきますよね。天皇陛下のために忠義を尽くす、教育勅語とかそういうところで、儒教的なイデオロギーが使われましたけれども、これも戦後に否定されています。しかし韓国では否定されませんでした。だから、韓国では、儒教というのはすばらしいものだという教えが、一貫して続いているのです。

ではここで、朝鮮王朝の王都のソウル（漢陽）のつくりを見てみましょう。

王都にまず何をつくったのでしょうか。王宮よりも前にご先祖さまを敬わなきゃいけないということで、宗廟といわれる歴代の王様の位牌をまつる建物、まずこれをつくるんです。宗廟は世界遺産にもなっています。宗廟をつくって、王宮をつくって、あとは土地の神様に穀物を捧げる社稷壇（サジクダン）と言われるものとメインストリート。これで儒教の王都のできあがりです。あとは風水地理なども参考にしています。中国やベトナムの王都もこういうまちづくりなんですね。こういうのを見ても、ああやっぱり日本は儒教国家じゃないなというのがよくわかります。

次に、「トキメキ☆成均館スキャンダル」というドラマを見てみましょう。これは、科举試験といわれる国家官僚試験を受けるための天才たちのお話です。500年の歴史の中で、この国家官僚に選ばれた人は約1万人しかいないんです。これがどれだけすごいのかというと、東大生が年間何人出るかというと1万人です。一方で、1回の科举試験で受かる人は33人ぐらいしかいませんでした。18歳ぐらいで受験することが多かったようですが、最年少13歳から82歳までの合格者

がいました。

科挙とはどういう試験だったのでしょうか。現在、国を治めているのは法律や経済なので、国家官僚試験ではそういう勉強をするわけですが、朝鮮時代に国を治めるときには何が大事だったかという、儒教の教えでした。ですから、儒教の教えを徹底的に暗記して、それを解答として書くのですが、その解答で詩を詠まなきゃいけないので、詩心も必要でした。儒教の教えがしっかりと頭に入っている人は、さぞかし徳も備わっていて立派な政治をするでしょうと、徳治主義といわれる、徳があるでしょうということです。哲学みたいな頭でっかちなやつがすばらしいという考え方なわけですね。両班（ヤンバン）と言われる頭でっかちな人たちが。頭がいいということが飯の種にもなるし尊敬も得られるというわけですね。また、科挙は一発逆転も可能でした。女性とか奴隷とか本当に身分が低い人を除けば、みんなにチャンスが開かれていたわけですから。もちろん貴族の息子とかかのほうが時間がありますからよりチャンスがありましたけれども、その試験に受かりさえすれば、20歳の小僧でも大臣になることができました。

当然ながら、王様も一生懸命儒教の勉強をしなければなりません。基本的なデータベースがあって、それらの本を全部暗記し、漢文ももちろん書けなければなりません。そういうことをもって国を統治していたんです。

あとは顕彰制度というものがありました。立派なことをした人、あるいは烈女とか孝子とか国のために命を捧げていった人を表彰するという文化、これを顕彰制度というんですが、これも儒教的なものなんですね。これは今でもありますね。

また、民衆の間にも、男女7歳にして席を同じにしていけない、男と女には役割分担がある、男尊女卑といった考え方が根づいていました。家の構造を見ても、女性が入る門と男性が入る門が違う、使う部屋も違うといった特徴が見られます。

それから勉強。日本の寺子屋では実学的な読み書きそろばんを学んだわけですが、韓国では、庶民であっても儒教を学ぶわけですね。論語とかそういうのを勉強させる。あとは、村のおきても儒教的な考えに基づいて作られていました。

お墓は、儒教らしさが極立つところですね。中宗といわれ、「チャングムの誓い」に登場する王様のソウルにあるお墓、世界遺産になっているところですが、土まんじゅうみたいな形になっています。土まんじゅう、つまり土葬ですね。遺体を焼くというのは仏教的なもので、儒教の死生観では焼いてはいけないわけです。基本的に儒教は土葬なわけですが、日本は、現在99%火葬ですから、両国のお墓は全然違います。

次はお葬式ですね。昔のお葬式では、麻布のぼろぼろの衣服を着ていました。なぜでしょうか。「自分が一生懸命にお父さん、お母さんを養わなかったためにお父さん、お母さんが早く死んでしまった。自分はもう着る物なんかには構ってられません」という象徴なわけですね。つえをつくのは、「悲し過ぎてお天道様なんかとても見てもらえない」という意味です。お葬式で激しく泣く、哭するというのも儒教文化から来ています。こういうのを見ても、日本とは違って上から下

まで徹底的に儒教の影響を受けていたのがわかると思います。これらは現在までつながるもので、もちろんなくなってきたものもたくさんあるんですけども、韓国文化は儒教と深く関わっていることがお分かりいただけるでしょう。

もう一つ、儒教社会は中国化ということでもあります。「イ・サン」や「チャングムの誓い」の中に、中国の使者がやってきていろいろ困らせるシーンがあったと思います。当時の朝鮮社会では、世界の中心は中国だったわけですから、中国の影響を非常に受けていました。華夷思想というのがありますが、これは要するに、自分は属国になり全てを受け入れますということです。つまり中国の世界観、中国の社会システムを全て受け入れることによって、自分たちを守ろうとしたわけですね。中国から侵略されないようにするためというのはもちろんありますし、他国から守ってもらうためでもありました。このように華夷思想では、世界の中心に中国があるわけですね。

中華思想には、天子といわれる皇帝がいます。皇帝が治めるところよりもちょっと外れたところというのは野蛮人が住むところですね。中華思想では、野蛮人を教化して教えてやらなきゃいけない、こういうふうにいるわけですね。中国から見たら、朝鮮は野蛮人の部類でした。日本に至っては棒にも箸にも引っかけられないレベルだったんでしょうけれども。朝鮮は隣国の中国を無視するわけにもいかないわけですね。何とか中国のご機嫌を損ねないようにしながらも、独立国家として保持していかなくちゃいけない。そこでどうしたかということ、小さい国ですから、刃向うんじゃないで、大きいものに巻かれていこうと考えました。中国に何とか認めてもらおうという思いから、一生懸命勉強し優等生を目指したわけです。そうやって、教条主義的ともいえるほど儒教を徹底的に社会に浸透させていき、ついには本家本元を超えてしまったというわけですね。朝鮮が儒教社会である背景には中国との関係が大きかったのです。

朝鮮という国名は誰がつけたのでしょうか。中国です。また、年号も中国のものを取り入れました。年号というのは時間の支配です。日本は、ことし平成天皇 24 年目の年ですし、西暦というのはキリスト教の考え方です。北朝鮮では、金日成主席が生まれた年を主体 1 年と数え、ことしは主体 100 年となります。このように時間を支配することは人間を統治する中において非常に重要なことです。それから、王様が着る服も、中国の臣下だと認められて着用していました。皇帝というのは 1 人しかいないので、朝鮮の王様は中国から統治を任された部下のような存在でした。王朝に世継ぎが生まれると「この人を王様にします」と中国にお伺いを立てて、「いいよ」と言われて初めて王様になれたわけですね。

迎恩門という門が都の西にありましたが、中国の使者がやってくると、ここでお出迎えしました。王様が土下座しながら中国の使者を迎えたのです。現代の感覚からすると大変屈辱的な光景です。ちなみに今は独立門という名に変わっています。このように、朝鮮は中国の儒教システムを受け入れていったのです。

この小国意識といわれるものは、現在の問題を考えるとにも非常に大事です。韓国は実はいまだに小国意識を引きずっているんですね。中国からアメリカに親分がかわったというふうには思

ったらいいでしょう。全国民を上げて英語を強烈に学習していることや、アメリカに対するあこがれのまなざしというんですか。中国のようになりたいというのが、アメリカのようになりたいというふうに変わったわけです。アメリカに追従するところまでは日本人にも理解できますが、近年の中国に向けられたグローバリゼーションへの変わり身の早さは、伝統的に小国意識の DNA を持っているというふうに、感じざるを得ないものです。

よく韓国を「東方礼義の国」と言います。よく間違っ義ににんべんをつけることがあります。が、礼儀、マナーのことじゃないんです。中国が、「韓国はよく礼儀を守り、マナーがいいですね」と言ってくれたわけじゃなくて、「東方の野蛮人の中ではまあまあ礼とか義というのがわかっている」という意味ですね。義（儀）の字が似ていますから、少々間違って解釈されていますが、これは中国に上の目目線で言われた言葉だったのです。

補足すると、朝鮮と中国の関係は西洋の近代の植民地とはまたちょっと違うんですね。朝鮮は中国の属国だったと言われることがあります。が、基本的に中国は朝鮮のことにノータッチでした。むしろ秀吉が朝鮮出兵して攻められたときに明の国が助けてくれたのは、冊封体制があったからでした。皇帝に対して王様が貢物を持って行ってへこししなければならないというのはありましたが、その倍になって返ってきたわけですね。経済的な効果があるという点で、いわゆる近代の植民地とは異なる関係だったのです。

このように前近代の東アジアには中国を中心としたシステム、華夷思想、冊封体制というのがありました。天とか天子とかいう語は中国、皇帝をあらわすわけで、信長が天下布武とか言ったりするのは、上記の空気を全く読めていなかった証しです。日本は東アジアのいわゆる中国システムに全然ひっかかっていなかったのです。そういうふうに、前近代を捉えるといいでしょう。

現代にも儒教の影響というのが色濃く残っています。例えば、「五倫」。これは何なのかというと、人間関係を形成する上で非常に大事な5つの教えのことなんですね。これが人間関係の基本になりますよというものです。特に、いまだに大事にされているのは「父子の親」と「長幼の序」の2つです。

ちなみにほかにどんなものがあるのかというと、「男女の別」です。男と女には役割分担がありますよ、男は外、女は内、男子厨房に入らずみたいなそういう思想です。これについては、最大与党の大統領候補が女性から出るような時代ですから、女性が内とかいうのは現代韓国社会では大分なくなってきたと思います。4つ目は、友達仲よくしようという「朋友の信」。5つ目は「君臣の義」、つまり自分の上司とかお殿様には忠義を尽くしなさいというものです。この五倫が徹底的に教え込まれるわけですね。

現在の学校でも道德の時間に五倫とか三綱五倫を学びますが、現代でも「父子の親」と「長幼の序」は非常にとうとばれています。例えば、「父子の親」、つまり親孝行のことですが、その親孝行といたら度胆を抜かされるぐらいのレベルです。1年間ソウル大学に留学したときに、あ

る友人がスーツを着て学校に来ていたんですね。「就職活動なのか」と質問したら、「いや、親の誕生日だ」という返事でした。「親はどこに住んでいるのか」と尋ねると、「釜山だ」と言うわけですよ。釜山といえば東京・大阪ぐらい離れているわけですが、一々正装して誕生日の挨拶に行くわけですね。「授業はどうするのか」と問うと、「先生が何とかしてくれる」と言うぐらい、親孝行の行為が認められているのです。もちろん仲の悪い親子もいますよ、たくさん。しかし、親孝行の公認度は日本とはとうてい比べものになりません。

目上の人に対する秩序である「長幼の序」はどうでしょうか。日本にもお年寄りを大事にする文化はありますがより徹底されているわけですね。バスや電車にお年寄りが乗ってくると、皆が当たり前のように席を譲り、譲られます。日本でも席を譲りますが、譲られたほうが返って申し訳なく思ったり、まだそんなに年寄りじゃないからと遠慮したりといったケースも見られます。ただ最近韓国でも儒教的な慣習がすたれてきていて、お年寄りが目の前に立っているんだけど、若い青年が寝ていたことがありました。すると目の前の老人が、「なぜ立たないのか」と本気で怒りだしたのです。日本だと、譲ってくれない相手に怒るというのはなかなかお目にかかれませんが、すたれてきているとはいえ、「長幼の序」もまだまだ根強いなと感じました。

「長幼の序」は、何もお年寄りに限ったことではありません。先輩後輩にも秩序が求められます。韓国の大学では学番といわれる入学年度を皆が自覚しています。例えば2008年度入学は08学番だとか、2009年度入学は09学番だとかいうのですが、これによってどちらが先輩か後輩かすぐわかるわけですね。同学年でも先輩だったら後輩に御飯をおごらなきゃいけないとか、そういうのがあるわけですね。これは大学だけでなく、会社に入っても入社年度を示す社番というのが付いて回ります。日本にも先輩後輩の秩序がないわけじゃないんですけど、ただその範囲がより広くより濃いいといえるでしょう。芸能界や超体育会系の世界だというふうに思っていたのだと思います。

こういう序列はK-POPみたいな最近のアイドルグループの中にも、存在するんですね。K-POPアイドルの多くは集団生活をしています。集団生活していると、年長者が偉く、年少者は食事の後片付けを全部やらされるとか、とてもつらいということはよく聞かれます。

次に、現代の韓国には、お勉強できることがすごいことという風潮が根強くあります。明治時代から官僚システム、科挙というものを取り入れている日本とは、その伝統が違うわけですね。儒教で頭がいいということは、道徳的にもすぐれていることを指します。さらに科挙試験に受かるということは、政治的な権力とか飯の種にもなる。お勉強ができると全てを手に入れることになるので、教育熱が激化してしまっているわけですね。したがって現在でも、大学の先生の権威には恐ろしいものがありますね。僕は、日本では学生にも邪険にされるような新米教員ですが、韓国へ行くとまるで扱いが違います。タクシーの運転手に「韓国語がうまいな。どんな仕事してるんだ」と聞かれ、「大学で教えています」と答えると、途端に態度が変わり、ありったけの知識をふりしぼって論戦を挑んでくるか、知に対してへりくだるかのどちらかでした。本学にも韓国

から留学生が来ていますが、日本の学生とは先生に対する態度が違います。日本人の学生と会っても、挨拶もろくにされないことがありますけれども、韓国の学生は向こうから僕がやって来るのが見えたら、起立してきちっと挨拶してくれます。そういう態度を見て韓国の人は礼儀正しいなと感じるわけですが、これも儒教文化のなせるわざなのです。

また、日本には日本一といわれるものがいろんな分野に存在しますね。団子屋で日本一とか。しかし、韓国は1つしかありません。勉強ができて首席合格することです。日本でも昔は、東大首席合格が讃えられ、天皇陛下から記念品をもらえたそうですが、韓国では今でもソウル大首席合格者のインタビューが新聞に大々的に載ります。科学試験の1位合格者は壮元（チャンウォン）といって非常に優遇されたのですが、そういう伝統がいまだに残っているわけです。

また、肉体労働を忌避する風潮があります。儒教の素養を身につけた支配層を両班（ヤンバン）といいますが、彼らはキセルよりも重いものを持たない、肉体労働は卑しいと考えていました。質素倹約で規則正しい生活をするというのはあるわけですが、騒いだり急いだりすることは良くないこととされ、体を動かす仕事は卑しい者がやるものと考えていました。この精神が現代にも引き継がれているため、肉体労働や商店を営むとといったことはあまり自慢できることではないわけですね。ですから、仮に自分が食堂を営んでいて、そこそこ繁盛していたとしても、息子には恐らく継がせないですね。大学に行って弁護士になれ、先生になれと言い、経済的にサポートしようとするのです。だから韓国には何百年続く老舗、そんなものはないわけですね。50年ぐらいで伝統があると言えちゃうのです。日本人からすると、たかだか50年ぐらいでなぜ威張るのかと感ずけますけれども。韓国留学時代に食堂をしている一家と仲よくなっていろいろお話を聞きましたが、息子や娘には自分のようになってほしくないと言っていました。お店を継がせたらいいじゃないかと思うんですが、勉強してほしいと言うのです。年長になると幼稚園をやめさせてまで塾に行かせて小学校の入学準備をさせていたので驚きました。とにかく勉強ができることが格好良くてすばらしいことなのです。ですから、8割が大学を目指すということになるわけです。

これには違った文脈もあります。競争が余りにも激しいグローバル社会とか格差社会になったためとか、いろんな要素が確かにあるんですが、やっぱり大学や大学院への進学率が非常に高いんですね。妻子がいて、仕事にも就いているのに、会社をやめて大学へ行く人もいます。芸能人にも大卒者が結構いるんですね。そこそこ売れて忙しいにもかかわらず、わざわざ大学に通うんです。男の人だと徴兵制がありますので、大学に通うことで兵役を延期できるとか、違ったメリットも確かにあるんですが、勉強できることがすてきだと思っているからなのです。日本のセンター試験に当たる大学入試の前には、「ことし大学を受験する芸能人、アイドルは誰々です」なんていうのがニュースになるわけですね。日本でも、ジャニーズの櫻井翔君が慶應大学を出ていますが、学歴を売りにする芸能人の数は微々たるものなわけですね。したがって、勉強しようとする志向性というのは、やっぱり儒教的なのです。先生は偉いし、勉強できるやつは格好

いいのです。

日本は文武両道なんですね。一方韓国では体育教育をしっかりやらないんです。韓国の女子は、泳げない、自転車に乗れないのが結構当たり前だったりします。ではなぜスポーツが強いのかというと、国威発揚でエリート教育をしているからです。日本の教育というのは、ある種バランスが良くて、女子にもサッカーをさせたりします。ところが儒教では、文を武より重んじるので、体育教育が軽んじられる傾向があります。

ここで韓国の祭祀の話をしておきましょう。祭祀がわからないと、韓国文化がわからないのと同じなんですね。韓国では祭祀をチェサと言いますが、要するに日本でいう法事です。「冬のソナタ」をはじめいろんなドラマでたびたびお目にかかります。チェサの供物に何を置くのかというのは、宋の時代からすでに決められていました。祭壇の東に何を置いて、西に何を置いて、果物は何を置いてと。けれども、70年代ころからだんだん崩れてきてスイカやバナナを勝手に置いてみたりと、地域や家によっていろいろ変化はしてきていますが。

日本の法事との違いが何なのかというと、祭祀は親孝行であるという点です。日本だって親孝行します、親が生きている間は。ですが、それは東アジアの孝からすると欠けているんですね。親孝行はこれだけじゃないんです。日本では「孝行したい時分に親はなく」というように、親孝行が親の「生きている時だけ」に限定されます。ところが韓国では、お父さん、お母さんが死んでからも生きているときと同じようにおいしいものを食べさせます。これが祭祀なわけです。例えば「冬のソナタ」のユジンが、祭祀におくれてやって来て、お母さんに叱られていました。なぜ叱られたのでしょうか。祭祀は命日になった瞬間に行うと決まっているからです。例えば8月5日が命日だとしましょう。すると、8月4日中にスタンバイしておいて、8月5日の深夜零時になったらすぐに祭祀を始めるわけですね。一体何をしているのかというと、一貫して生きているときと同じように接します。霊が帰ってくるという前提で行いますから、ドアをあけるんです、霊が入ってこられるように。入ってきたらお酒をつぎ、まず祝文を読みます。そのあと「御飯を食べてください」と言い参加者は部屋を出ます。霊もやかましいと御飯を食べられないでしょうから。その後は親族で食事をします。このように生きていたときと同じように親孝行をする、これが祭祀なのです。

4代前まで祭祀をするというのが基本的なルールでした。4代前というと、ひいひいおじいさんですね。日本だと、ひいひいおじいさんの名前もなかなか言えないでしょう。ただ、最近は大分簡素化されてきて、生きているのを見たことがあるレベルのおじいさん、おばあさんまで祭祀を行うことが多いようです。このように、祭祀というのはご先祖様に対して孝行することです。日本は現在生きている親にしかしませんが、韓国ではご先祖様、つまり現在だけじゃなくて、過去についても行うのです。

このような祭祀を K-POP アイドルだってペ・ヨンジュンだってやっています。やらなくてい

い人はクリスチャンくらいのもです。というのは、プロテスタントでは先祖崇拝が禁じられているため、伝統的な祭祀を行えないからです。祭祀はとても面倒くさいものです。祭壇を準備するだけでも大変な労力です。だから、結婚した女性が、祭祀が嫌でクリスチャンになるというケースも結構あるようです。

また、韓国人は男子を生めとよく言うわけですね。ドラマでも、母親が、息子よ息子よと溺愛しますね。なぜでしょうか。祭祀ができるのは男だけだからなんですね。祭祀をしてもらうには、男子を生まなきゃならないのです。これが韓国の儒教の死生観なわけですね。自分はいつか死ぬんだけれども、自分をご先祖さまにやってきたように、自分も祭祀をしてもらうことによっておまんまが食えるんだと。体は亡くなるかもしれないけれども、子孫の血の中で生きていくんだという生命観なわけですね。多くの日本人の死生観は仏教化していますが、韓国は血の中で生きていくという儒教的な死生観を持っているのです。ですから、息子を生む、祭祀をする、といったことが非常に大事になるわけですね。

日本でも親を大事にしようと言いますが、日本の孝と何が違うのかというと、孝の中に死生観があらわれている点です。だから韓国ドラマの中にも祭祀の場面が頻繁に出てくるわけです。留学生にも本当に祭祀をしているのかと聞いてみましたところ、「よほどの理由がない限り、祭祀を抜けるのは難しい」と答えていました。現代人は物すごく忙しいですが、それでも祭祀はおろそかにできないのです。

また、韓国の親族呼称は日本と比べて非常に複雑です。なぜかという祭祀をやるからなんです。日本だとお父さんの兄弟もお母さんの兄弟もみんな「おじさん」ですね。漢字がちっと違うかもしれませんが。ところが祭祀をすると親族が頻繁に集まるので、個別の呼称が必要になりました。お父さんの兄はクナボジ、お父さんの弟はチャグナボジといった具合にです。祭祀は父親の血統について行うので、父親の血統の呼称が複雑化しました。一方で、母親の血統の呼称は余り複雑じゃないんですね。だから、儒教の影響だなといえるわけです。その国にとって大事なものの、例えばエスキモーに行ったら、雪が物すごく細分化されているそうですし、日本だと、魚が細分化されているというのはよく聞きます。韓国は親族の呼称が細分化されている。これは明らかに儒教の影響なわけですね。

異母兄弟もドラマによく登場します。血の争い、血に対するこだわりというのは祭祀にもつながるものなわけですが、血統の内か外かという点において、非常に厳格です。日本ではいとこ婚も許されますが、韓国では同姓同本同士の結婚も最近まで禁じられるほど、血統に近い者同士の結婚はナーバスな問題でした。例えば「冬のソナタ」にも、ユジンとミニョクさん（ペ・ヨンジュン）が、もしかしたら兄妹かもしれないみたいなエピソードが出てきますね。韓国人から見たらぞくぞくっと来るタブー感があるわけですね。

また一方で、「冬のソナタ」は儒教をある種、排除してしまった、日本人にはすごく受け入れやすいドラマだったのかもしれませんが。最初にも、今はもうたくさん放送されているホームドラ

マのようなこてこてのドラマを見せられたら、日本人には受け入れにくかったと思うんですね。「冬のソナタ」を見た韓国の文化人類学の大家である東大の先生が、あんなもの韓国社会じゃないと言って怒り出しちゃったくらいですから。何が現実的でないかという、まず父親が出てこないでしょう、「冬のソナタ」には。父親の権威とか威厳というものがないわけです。ミニョクさんは、お母さんに育てられるわけですね。実際の韓国社会の若者は、学校で物すごく教育させられるとか軍隊に行くとか、そういうのがあるわけですが、その間に彼はアメリカに行っちゃってるんです。

さらに、韓国社会っぽくないのは、主人公のペ・ヨンジュンとチェ・ジウが会おうのが学校である点です。男女7歳にして席を同じくせずですから、男女共学なんていうのはその当時なかったわけです。最近、共学が増えていますが。だから、「冬のソナタ」を見て、あんなものうそっぱちだ、あんなものは韓国社会ではないと怒っていました。

それから日本も韓国も会社の経営の仕方が儒教的だと言われています。日本の経営の特徴といえば何なのかというと、年功序列ですね。能力云々よりも勤続年数によってお給料が上がっていく仕組みです。そして正社員には手厚い福利厚生がありました。会社が社員を家族のように面倒をみる経営で日本は昭和期を乗り切っていました。このように日本は、会社人間などと言うように、社員同士が擬似的な家族になっていました。だから先代の社長のお墓詣りに社員みんなで行くとか、そういうことをやったりするわけです。

韓国はどうでしょうか。例えばサムスンがどうやっているのかというと、有能無能関係なく、創業者の一族が全部を仕切っています。家族で株式も持ちちゃって、一族だけで牛耳るんです。よくドラマの設定とかで見る会長の奥さんが副会長というのがそれです。サムスンの経営判断が早いのもオーナー企業だからですね。オーナーとCEO、つまり実質経営を任されている社長とは全然違います。CEOはもし能力がなかったら失脚し、また違う人がCEOになります。韓国ドラマには、オーナー一族と平社員の女性が恋に落ちる物語が多いですけども、オーナー一族はまるで別世界の人間です。オーナーに血が近ければ近いほど出世も早い。オーナーとの血縁関係がものをいう、究極的には血統内の人間しか信用できないとする儒教的な思考の表れなのです。

韓国に同じ姓が非常に多いのはご存じだと思います。キム、イ、パクとかです。姓も中国から入ってきているから、中国化の1つといえるでしょう。実は姓だけでなく、下の名前も似ています。これも儒教の影響です。行列字という名付け方があるんです。たとえば五行の万物、木、火、土、金、水という字を利用します。ご先祖様から見て、何代目の子孫なのかというのがわからなくならないように、この代は「木」、次の代は「火」、その次の代は「土」と、あらかじめ名前に使う字を決めておくのです。年の離れた10人兄弟がいたとして、おじさんとおいが同い年だったりにした場合に、関係がわかりにくいから、何代目なのかがわかるように目印をつけておこうということですね。ですから、同じような名前ばかりになるわけです。そうすると、親族が集まった

ときに、名前を見るだけで自分よりも上の代の人かが分かります。たとえ自分より年下でも、代が上であれば、敬語を使うというルールもあります。ただ、最近はクリスチャンが増えたことで名前も多様化しています。いわゆるきらきらネーム、モーセとか、ヨハンとか、そういう名前が出てきています。必ずしも、今は行列字にこだわらなくなってきてはいるんです。

最後に日本文化と韓国文化で大きく違うところというのは、具体的、物象的なものより観念的、抽象的な事柄を重視する点です。例えば、お土産をとっても、日本は物とか場所をすごく大事にしますね。物に思いを込めるんです。お土産文化です。旅行へ行ったらまずお土産、自分が楽しむよりもお土産は何にしようか考えるというくらいのプレッシャーがありますね。韓国人もお土産はあげるんですよ。ただ、僕も偉い教授に会うときにはもちろん土産を持っていくんですが、日本だったら封をあけて、「すばらしいですね」と何かリアクションをしますが、「ああ、そうか」これぐらいなんです。物は卑しいと考えているわけです。儒教では物に余りこだわらないのです。だから意外と虫や植物の名前も知らないんです。僕なんか外国人ですから、何という名前なのか知りたいわけです。「この草は何というの?」「知らない。葉っぱ」とかいうわけです。日本人と比べると物の名前にあまり興味がない人が多いです。韓国人を一般化するといけないですけども、そういう傾向が見られます。また、日本は場というのが大事なんです、韓国はどちらかというとそういうものはあまり大事にしません。引っ越しが多いし、海外移住も平気です。いろんな文脈はあるんでしょうけれども、留学や就職も含めて海外にばんばん出ていっています。目に見えない血のつながりというもの、ネットワークを大事にしていることから分かるように、彼らにとって大事なのは抽象的な事柄なのです。また、観念的なことを好むので言葉を大事にします。時代劇でも、党争といって、言葉によって相手を打ち負かす場面を見かけます。日本はどちらかというと物に頼りやすく、「お父さん、お母さん、ありがとう」と口では余り言いません。韓国ではお父さん、お母さんに「サランハムニダ」と本当にちゃんと言うんですね、口に出して。これも日韓の違いの1つでしょう。

本稿は2012年度帝塚山学院大学・（財）大阪狭山市文化振興事業団主催国際理解公開講座（前期）における講演をまとめたものである。